

出土品から浮かび上がる

受け継がれてきた人々の暮らし

発掘調査で出土した土器などの遺物が、どうしてどのくらい前のものか分かるのだろうかと思われる方も多いと思います。

遺物の年代を知るためには、出土した遺物の土層を比較する方法や、遺物のもつ形や文様などの特徴を比べて並べていく方法などがあります。これらの方法を積み重ねてできた遺物の年表(並び順)を編年表といいます。また、時期を表すのに適した資料がまとまって出土したときには、その資料が指標となり、見つかった遺跡の名前が、その時期の遺物の名前として使われることがあります。こうした遺跡のことを標式遺跡と呼びます。

専門家に聞く!



私の注目!



応援職員 (鹿児島県)

いまむら ゆうき
今村 結記 さん

外に開いた土器の口のあたりの複数の線状の文様が特徴として挙げられます。

皆さん、益城町にも標式遺跡があることをご存じですか。その遺跡は、古閑にある古閑遺跡です。九州自動車道の建設の際に調査された遺跡で、縄文時代後期末〜晩期初頭(約3000年前)の古閑式土器の標式遺跡となっております。この古閑式土器は、大辻遺跡でも多数出土しています。写真の土器が大辻遺跡で出土した古閑式土器です。

石包丁

私の注目!



大辻遺跡から弥生時代の竪穴住居が見つかり、その当時の人々が暮らしていたことが分かりました。遺跡からは弥生土器をはじめ、米作りの村ならではの道具も出土しました。弥生時代は日本でも米作りが始まった時代と考えられています。

私が注目するのは「石包丁」です。現代の稲刈りは機械化され、コンバインで行います。その前の時代には、鎌で稲の株を根元から刈っていました。しかし、弥生時代は籾のついた稲の穂先を一つずつ摘み取って収穫していました。石包丁は石を半月形の薄い板に加工し、片側に鋭い刃が付けられたものです。小さい穴が二つあるのは、指をはめる紐を通すためです。石包丁は大辻遺跡が米作りの村であったことを物語るとても重要な道具です。



応援職員 (大分県)
はらだ しゅういち
原田 昭一 さん



応援職員 (福岡県)
さいべ まや
齋部 麻矢 さん

私が注目ののは、平安時代の「土師

赤と白の土器

私の注目!



実は、この部分にだけ白い色の粘土を使い、色を変えて赤と白の2色の器にしているのです。県内では、このような土器はあまり見られません。同時に出土した他の土器は普通の橙色で、これだけが特殊なものでした。

「なぜ高台だけ白くするのか」は、残念ながら今の段階では分かっていません。ただ、この土器は他の完形の壺や碗と一緒に穴の中に並べて置かれていたようで、古代の祭祀に関連する可能性があります。神や死者に捧げる器として、特別な土器が使われたのかもしれない。赤と白。一つの土器に込められた古代の人の思い、そしてその色彩感覚、とても興味を引かれる資料です。

器」と呼ばれる素焼きの器です。茶碗のような形で、底には「高台」と呼ばれる台が付けられています。一見橙色をしています、よく見ると高台の部分だけ白いことが分かります。

この遺跡で注目すべき出土品は、今から700年ほど前に作られた「須恵器の片口鉢」です。これは、現在の兵庫県神戸市西部から明石市周辺で、平安時代後期から鎌倉時代にかけ作られた東播系須恵器と呼ばれる土器です。ここで作られた碗や鉢などが西日本一帯に商品として流通していました。大辻遺跡で発見されたことで、その流通が熊本の内陸部に及んでいたことが判りました。また、なぜ遠くから運ばれてきたこの土器を壊れてもいないのに埋めたのか、その理由は今後調査していく必要があります。



私の注目!

須恵器 (片口鉢)



応援職員 (神戸市)
なかたに ただし
中谷 正 さん

私は、神戸市から震災復興の支援で益城町にまいりました。この土器も神戸周辺の港から瀬戸内海を渡り、ここにたどり着いたのでしよう。はるか昔からの神戸と益城町の不思議な縁を感じる一品です。